

小中学校の架け橋となる
外国語活動により附属小中学校を結ぶ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-05-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上野, 澄子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/5463

I

小中学校の架け橋となる

外国語活動により附属小中学校を結ぶ

上野 澄子

はじめに

「小学校の時のこの子の様子を聞かせてください。」

今から 20 年近く前のことである。ある中学校の男性教員の急な訪問を受け、応対した。担任する生徒が昨晩帰宅しなかったのだという。詳しく様子を聞き、その子について知りうる限りの情報を伝えた。男性教員は納得して帰ったが、現担任と旧担任は、その子の問題行動を介して、その日初めて顔を合わせる結果となった。

この頃、まだ本格的な小中連携は進められていなかった。小学校から中学校へと卒業生を送り出す際に、「小中連絡会」という名称で、情報交換が行われていた。出席者は主に、小学校側が 6 年生の学年主任や担任に教頭、養護教諭、中学校側は担任が未定のため教頭と教務主任であった。小学校の教育課程や研究内容に踏み込んだ話し合いはあまりなく、学校での子どもの様子や健康状態などについての伝達が中心となる連絡会であった。

その後、福井県内の小中連携は加速度的に進んだ。福井市では中学校区ごとに小中学校の教員が集まり、教科やテーマごとに報告し合う研修会が持たれるようになった。そこでの話し合いを通してお互いの業務についての理解も深まり、それぞれどんな問題を抱えているのかを共通認識し、信頼関係も築かれていった。こうした小中連携がもたらす教育効果の大きさは、想像に難くない。

福井大学教育地域科学部附属小中学校の校舎間は、廊下を隔てただけの近い距離でありながら、精神的には遠く感じられる。日々行き来しているのは、教員でも子どもでもなく、おそらく給食を運ぶワゴン車であろう。同じ敷地内にあり、校舎が隣接しているにもかかわらず、これまでお互いのへだたりは、物理的な距離をはるかに超えていた。

福井大学教育地域科学部には、幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校の附属 4 校園がある。附属学校園のあり方が文部科学省をはじめ、社会全体から問われる中、本学の次期中期目標・中期計画でも附属学校園の果たすべき役割が示され、附属幼-小-中や附属特別支援学校における小-中-高の 12 年間の見通しを持つことが明確に打ち出されている。

1. 突破口

附属小学校において、拠点校担当教員として協働研究を続けてきた。研究部との研究構想や理念の共有、全体研究会での全教員との協議、年に数回行われるバズセッションへの参加、そして高学年の助言者としてたえず関わりを持ち続けている。

また、教職大学院では教職専門性開発コースのストレートマスターをインターンとして、1年間学校で実習することを位置づけている。この長期インターンシップを受け入れるのは附属学校園をはじめとする拠点校であり、昨年度より常時実習生のいる状態が続いている。インターンが授業実践を行う場合は、大学担当者として学校を訪れ、学校の教員とともにインターンへの指導を行っている。同時に、拠点校からは現職教員がスクールリーダー養成コースの院生として入学してきており、メンター教員となるなどインターンへのさまざまなサポートをしている。

附属小学校では、昨年度、今年度ともにインターンを受け入れており、彼らは週3日間授業参観や実践、校務の補助をしながら教師の仕事の総体を学んでいる。また、昨年度のインターン2名は、2年次の今年度、講師として毎週2～3日勤務をしながら、1年次のインターンシップの学びを実践に結びつけようとしている。

このような関係が始まって、今年で3年目となった。従来、大学教員と附属学校園の教員との関わりは、ほとんどが研究集会を中心とした年間3回のみであったが、教職大学院の開設に伴い、大学院の担当教員が学校へ足を運ぶ機会が増え、お互いの距離が縮まっていった。

「附属と大学はうまくいってない。」「附属同士も仲が悪い。」他大学のある教員からかつて聞いた言葉である。この問題は、全国の多くの大学附属の学校園が抱える共通の悩みなのだろう。しかし、つなぐのは人の力である。大学教員がその架け橋となって力を尽くせば、きっと流れはできる。年度当初おぼろげだったものが、確信に変わりつつあった。

2. 流れを引き寄せる

新学習指導要領は平成23年度より完全実施となる。小学校外国語活動は、その目玉となっているのだが、今や想像を絶するような圧迫感をもって小学校教員にのしかかっている。

附属小学校では、これまで総合的な学習の時間や学校裁量の時間において英語活動を実施してきた。その大半は、地域の英会話塾から派遣される講師の行うレッスンであった。このスタイルを取ってきた学校は全国でも少なくない。月1回程度の訪問で、講師の方はなかなか子どもの顔と名前を覚えられず苦勞していたようである。また、少人数の塾と違って、数十人の子どもを一度に引き受けてレッスンをすることに慣れておらず、戸惑う様子も見られた。文部科学省の方針である「担任が行う外国語活動」の意義は、その点でも明確に感じられていた。

附属小学校5年生担任の嶋本教諭は、これまで年間を通しての研究の軸足を国語科き、研究集会での授業公開も行ってきたが、外国語活動の実施を機に、外国語活動へ切り替えた。迷いは大きかったが、前任校の同僚からの支援協力を得て、研究を進めていた。

12月4日。附属小学校研究集会の各授業会場には、附属中学校の教員の姿が複数あった。外国語活動の授業部会には、英語科の上田教諭も出席した。附属小学校と中学校は互いに協力者となり、年2回の助言者協力者会に出席し、教科ごとに授業公開に立ち会って、研究協議でも協力者を務める。どの教科でも、当然附属小中学校の教員同士のつながりややりとりはあるだろうが、どこまで相手方の実践に踏み込んで研究内容を共有しているかは見えてこない。単なる「おつき合い」では意味がない。本当の意味での研究

協力が成立し、教科の縦系がつながってこそ「附属」としての価値が見いだせるのだと考える。

上田教諭は、小学校外国語活動の授業を参観するのは、この日が初めてだったようだ。小学生の活動する姿を見つめながら、この子達が今度は、中学校で英語を学んでいく姿を想像していただろう。そして、小学校外国語活動の授業スタイルを目の当たりにして、中学校英語科との差異を感じ取っていたに違いない。

一方、嶋本教諭は昨年来附属中学校の英語科の協力者となって研究に関わっている。「英語は専門でないから…」と控えめではあるが、小学校から送り出した子どもたちの姿を追いながら、英語の授業を参観していた。また、協議の場でも子どもの様子を熱く語っていた。このようにして、外国語活動と英語科における附属小中学校のつながりは、徐々に深まっていった。

11月の小学校英語教育研究会で同席した上田教諭に、外国語活動で小中交流の機会を持ってないかと打診したところ、快諾を得た。そして翌週の遠藤教諭の授業研究会終了後、授業を参観した嶋本教諭と上田教諭を交えて4名で打ち合わせ、方向性を探った。

1月9日に行われた附属学校園合同研究会は、学校園連携の視点で、研究紀要をもとに双方の研究内容を報告し合う機会が持たれた。英語の分科会への出席者の中には、本学英語科の伊達准教授、附属特別支援の教員3名に加え附属小学校の嶋本教諭、附属中学校の上田教諭、遠藤教諭の顔ぶれがあった。小学校は「協働して学びを深める授業」、中学校は「学びの必然性」をキーワードに、それぞれの研究実践報告を行った。第3回を数えるこの合同研究会で教科・領域別の形をとるのは、今回が初めてであった。開催までには、本学の森透教授の働きかけで各学校園の研究主任が数回打ち合わせており、ようやく縦のつながりが見えるようになった。

この機会を捉えて、具体的な話し合いを持ち、ようやく交流が実現する運びとなった。

3. 流れをつくる

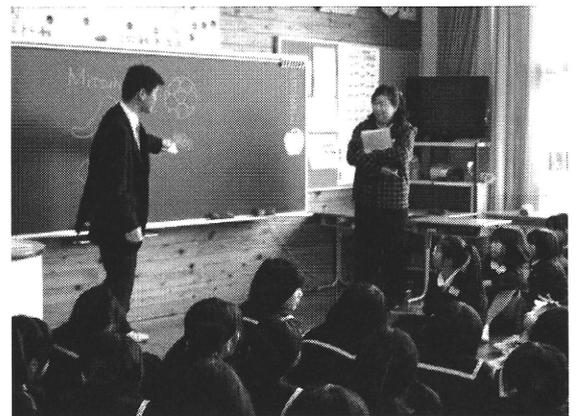
1月25日（月）朝の1校時。教室に子どもたちの歓声が響いていた。

附属小学校の5学年の教室である。附属中学校の第1学年の生徒が5学年生の教室を訪問し、英語を使って交流する時間を持った。お互いの好きな食べ物やスポーツ、教科などを伝え合って自己紹介した。

5年1組の教室では、上田教諭のパフォーマンスを受け、中島教諭がジェスチャーを交えて英語で答えるというインタラクションが展開され、それを見ていた小中学生は大喜びであった。その後、インタビューシートを手にした附属小中学校の児童・生徒は、ほとんどが初対面ながらも、両教諭のやりとりを真似しながら、英語で自分自身について表現していた。

この光景は、隣の5年2組教室でも見られた。遠藤教諭と嶋本教諭が子どもたちの前に立ち、遠藤教諭は黒板に絵を描きながら、自分の関心事を紹介した。コミュニケーションとは、言葉だけでなくア

イコンタクトを取りながら、心を通わせていくことが大切であることを伝え、どの子にもこやかな表情で



その様子を見つめていた。これから始まる活動を予想しながら、きっとわくわくしていたのだろう。

A : Hello! My name is A.

B : Hello! My name is B.

A : I like baseball.

B : Me, too.

会話は簡単な内容で、お互いのことがざっくりつかめたら、インタビューシートに書き込んでパートナーチェンジをするという流れであった。発達段階から考えると、日本語で尋ねれば、「なんでそんなこと聞きたいの?」と一蹴されてしまいそうな活動だが、英語で会話するからこそ子どもたちは緊張しながらも、一生懸命考えて自分を表現していた。

両校の校長、副校長をはじめ主幹教諭や研究主任もこの授業を参観し、楽しく和やかな交流を見守っていた。今後このような活動が一層活発になるようにと期待のふくらむ時間が流れていた。

4. 交流の成果と課題

交流授業の数日後、附属中学校の上田教諭から小中両方の子どもたちの感想と授業を行った4教諭からのメッセージが届けられた。以下に示すのは、嶋本教諭と中島教諭のコメントである。

○中学校の先生がリーダーシップをとって、小学校の教員をひっぱってくれたので、デモンストレーションが進めやすかった。子ども達も理解しやすかったようだ。(日本人同士ということで)コミュニケーション活動の意図がはっきりと子ども達に伝わり、子ども達のインタビュー活動に対するくいつきも良かったように思う。

○お互いに刺激を受ける部分があってよかった。

小が中から受けた刺激・・・中学生の書く力、分からないことを分かりやすく教える力、進んで発言する態度、中学校へ向かう楽しみ

中が小から受けた刺激・・・英語で話す力、積極性、分かろうとする態度

英語的な面だけでなく、附属が大切にしていることに関してもお互いに刺激を受けていて、小中がつながっている実感を味わえたようだ。事後の感想交流も子どもたちが中学生にほめてもらうことで自信になったようだ。教室付近に掲示して、保護者の理解も深めていきたい。

○我々小学校の教員は、英語を専門とする中学校教員の英語を使いたくなるような活動の技を学んだ。さすが中学校の先生は、英語をつかいながら子どもをひきつけるのが上手だと感じた。お手本にしたい。

○子ども達同士の自己紹介をする活動は、英語で話す必然性はあるのか・・・と少々疑問に感じていたが、日本語で尋ねるには、どうだろうかという話題を英語を使って何とか伝えようとする姿に英語で話す必然性があるように思った。小学生に対し、中学生に対して英語を使って話さなければいけないという少し緊張感をもった状況をつくることができたし、中学生には小学生に分かりやすく話すという状況をつくることができたのではないかと。何よりも、両者ともコミュニケーションを楽しんでいる姿がよかった。

○最初の隊形は、小と中が別れて並んでいたために、少々心理的な圧迫感があった。グループになるなどして、小中がうち解けて会話できる状況を作ってやるとよかった。

○打ち合わせは4人が揃わなかったもので、担当者4人が集まって共通理解したほうがよかった。ねらいがぶれない。

○たくさんの先生方にも関心をもってもらうことができてよかった。外国語活動への理解につながる。

このように、大きな刺激を受けつつ、次への出発点と考えられていることが分かった。これで終わっ

てはいけない。次につないでこそ価値があるという思いが伝わってきた。

上田教諭、遠藤教諭からも同様に、次のようなコメントが寄せられた。

- 小学生にとっても中学生にとってもプラスになる授業をするために、お互いの自己紹介をすることになった。小学生にとっては中学生から英語自体だけでなく英語でどのようにコミュニケーションを図ればよいのかを学ぶことができる。中学生にとっては、小学生が話し相手になってくれる上に、自分の英語がきちんと伝わるかを試す機会にもなった。小学生が自分たちの英語を理解してくれることで、自信につながる。このような理由で、小学生にとっても中学生にとっても有意義な時間になると考えていた。
- 当日授業をしていると、小学生からも中学生からも楽しそうな表情を見ることができた。最初はグループ同士で話す場面が見られたものの、途中で「アイコンタクト」や「英語で話すこと」「1対1で話すこと」などを意識させた後は、どの児童・生徒も自分から話しに行き、英語でコミュニケーションを図ろうとする姿が見られ、授業を終えるのが残念なくらいに英語を楽しんでいた。
- この小中合同の授業は小学生にとっては目標を見ることができ、また、中学生にとっては自信をつけることができる貴重な時間になると思う。小学校・中学校両者の学校行事の関係で、なかなか共通の時間を生み出すことが難しいかもしれないが、今後何らかの形で続いていくことで、ある成果が生まれるのではないかと期待している。

良かった点

- 附属小中連携（英語科）の確かな第一歩となったこと。
これまで、「近くて遠い」廊下でつながっていた。小中学校が今回の実践で、「少し近いもの」に感じられたことがまず第一に挙げられます。福井大学上野先生の多大なる御協力の下で双方の教員が「やらなくちゃ」という気持ちを持てたこと、さりとして肩肘を張るわけでもなく、「とりあえず、やってみよう！」というリラックスした気持ちで当日を迎えられたことがありがたかったです。
- 双方の子どもたちが、楽しく意欲を持って活動に取り組めたこと。
附中生の事後の感想を見ても、大半が「楽しかった」「またやってみたい」というものでした。教科の枠組みの外で、子どもたちの感覚には「先輩」であること、「助けてあげなきゃ。リードしてあげなくては。」と自覚が芽生えてきたのだと思います。
- 双方の英語のレベル、発達段階を教員が実感できたこと。小学生に話しかけてみて、その反応を直に見ることで、英語のレベルを実感できたことが非常に大きかったです。また、活動の様子から「生身の小学生のようす」に触れることで、発達段階についても感じることができました。小5の段階を知ることで、中1の4月の英語授業のあり方について考えることができました。また、発達段階からは、中1の担任としての子どもたちの捉え方について再考させられました。おそらく、附小の先生方も同様のことを感じ取られたのではないかと思います。小中連携授業の大きなメリット、小中の接続をスムーズにするための大きなメリットだと感じました。

問題点（今後の課題）

○当日の時間調整、会場調整

細かいことですが、附小・附中の時程が異なり、また、ともに余剰スペースに限りがあるため、他クラス、他学年への影響を考慮しつつ設定・調整していかなくてはならないと思いました。今回は、附小さんに全面的に譲歩いただき、実施にこぎつけることができました。ありがとうございました。

○当日までの準備・役割分担

この点についても、今回は附小さんがほとんど対応して下さいました。授業の大半はプランニングいたしました。一方的であったかと反省しておりますし、プリント類の作成・印刷についてもお任せしてしまいました。申し訳なく思っています。ただ、双方忙しい中での実施であり、本来なら事前に十分打合せを行うべきなのでしょうが、それも叶わず、かといって互いに無理をして実践を続けていけば、将来的に必ず「中止」という決定を迫られる時が来ると感じました。大きな問題点であり、今後改善していく必要性を感じました。

双方の子どもたち、双方の教員にとって意義ある活動とするために

○これが最大のポイントであると思います。この活動に十分な労力対効果を感じなければ、継続の必要性を感じません。これは今回携わった自分を含めた4人の先生方にとっても、子どもたちにとっても同じことだと思います。至極当然のことですが、

- ①小学生にとってのメリット、デメリット
- ②中学生にとってのメリット、デメリット
- ③小中教員にとってのメリット、デメリット

の3つの項目をよく考え合わせた上での実施をすべきであると強く感じました。従って、どの学年とどの学年が、どの時期に、どのくらいの時間を使って連携授業を行うことが効果的かをよく考えてみるべきだと思います。「イベント」で終わらせないようにするためには、今後、この項目についてよく考えてみるべきだと思います。

これらの意見は、大変貴重なものであり、今進めていく上での試金石となる。さまざまなハードルを乗り越えなければ実現できない小中連携であるが、のエネルギーと実践して得られたメリットを比これまでおそらく後者は低い評価に止まったのうか。一つ一つのハードルをクリアしながら、を丁寧に創り上げていくためには、まず熱意と提となる。



後小中連携を一ドルを乗り実践するため較した場合、ではないだろ互恵的な連携環境整備が前

また、小中連携でなく、幼小連携、幼小中や小中高連携においても同様のことが言える。これらは、単独で研究テーマとなりうるものであることから、一教科や数名の有志だけでなく、学内で組織を立ち上げて取り組むべき課題であるとする。また、他大学や学会、研究会等と情報交換を密に行い、各学校種間の連携に関する事例研究を行っていくことにより、よりよい方向性を探られるのではないかと考える。

小学生の感想	中学生の感想
<p>1-Cのみなさんへ</p> <p>ほくは今日、中学生の人が来たとき、すごくきんちょうしました。インタビューをすることか決めた時、中学生としてくるかなと不安でした。</p> <p>インタビューが始まるとすぐ中学生の人がやって来て、いねいにインタビューに答えてくれました。</p> <p>と中、ぜんぜん話しかけられながら、中学生の英語の先生が中学生の所につれていってくれました。そのおかげで、四年生の時の班長とインタビューをすることになりました。</p> <p>その中学生は、インタビューシートがほとんど英語で書いてあったので、ほくも中学生になったらあれくらい書きたいなと思いました。</p> <p>このインタビューをすることとで、ほくは知らない人と話すことがうしろまくなりました。</p> 	<p>5年生のみなさん、今日の英語の授業はありがとうございました。5年生とは思えないくらい、僕はみなさんの英語が上手だと思いました。話す態度や人を誘ったりする様子も積極的で、こちらをとってもやりやすいと感じました。楽しく話していてこちらにもあたりました。</p> <p>笑顔で自分の伝えたいことを英語で伝えるの、とても難しいことだと思います。ですがみなさんはやがてきていてすばらしいと思います。</p> <p>もう二年後にはみなさんも中学生になっていることだと思います。英語は話す、書く、聞くということができるなければいけず、状況によって使い分けたりととても難しい教科ですが、がんばってください。みなさんうき、ときます。みなさんが後はいとして、この附属中学へ来てくれることを楽しみにしています。英語の授業本日に楽しかったです！ありがとう！</p> 

5. 交流の意義

英語の免許状を保有する教員が、どの小学校にもいるわけではない。また、そうであったとしても、長く英語の環境から離れていれば、気後れするのは当然である。だからこそ、中学校の英語科教員と連携し、専門的な内容について気兼ねなく話し合える土壌が必要となる。一方、中学校の英語科教員にとっても、小学校外国語活動は未知の領域である。「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」では、小中ともに同じ目標を持ちつつも、どのように体験的理解を深め、音声や基本的な表現に慣れ親しませていくのかイメージすることが難しい。

今回は小学校第5学年と中学校第1学年との交流であったが、もちろんこれがゴールではない。双方の研究集会での授業公開や研究紀要の作成に向けて、附属小中学校の教員が

お互いの研究内容に踏み込んだ形で関り合うようになればと考える。例えば、「小学校外国語活動ではこのような体験をしてきているから、中学校ではこのように…」、「中学校1年の英語の教科書では、最初にこんな教材があるから、小学校では…」というふうに、お互いを意識しながら授業を組み立てていくことが挙げられる。さらに、助言者・協力者会等を活用してカリキュラムの一貫性を図ることができれば、英語教育そのものに大きな流れが生まれ、他教科・領域にも波及していくと予想している。また、公立小中学校の英語教育への大きな示唆となり、本学の次期中期目標・計画にも掲げられている附属学校園の地域への貢献が実現することとなる。

おわりに

小中の子どもたち同士が交流の機会を持つことは、小中併設の学校であれば日常の何気ない一場面であろう。しかし、福井大学附属小中学校の「近くて遠い」廊下を通して小学生と中学生が交流するまでの道

のりは、さらに遠いものであった。距離を縮めるためには、教員同士の信頼関係を深め、気持ちを通じ合わせていく努力が何より必要となる。その上で、具体的な活動による連携がスタートできるのである。

先日、ある併設幼稚園の教諭から同じような内容の話を聞いた。その幼稚園は小学校との接点がほとんどないという。気がかりな子どもについて相談したくとも、その子の兄弟を担当している教員と話す機会も作れず、どうしたらよいか困っているとのことだった。同じ敷地内で隣接していながら、目には見えない高い壁を作っているのは、他ならぬ教員自身である。

大学や教育委員会、教員皆が教育活動をつないでいこうとする気運が高まれば、費やす時間以上のものが得られるはずである。幼小、小中の接続期には時折継ぎ目にほころびが生じ、それが子どもにしわ寄せとなって現れてくる。このことへの対応は、受け入れ側にとって大きな問題となって立ちほだかり、当事者に精神的負担までも強いるものとなる。

そう考えたとき、互いに連携し合うことがもたらす効果は小さくない。通り一遍の情報交換ではなく、教育課程や研究活動、学校文化の共有化が図られれば、スムーズな接続につながり、さらに地域に根ざしたコミュニティスクールの創成にもつながっていくだろう。

参考文献

文部科学省『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』2008

文部科学省『中学校学習指導要領解説 外国語編』2008

福井大学教育地域科学部附属中学校研究会『授業のプロセスとデザイン第2巻』2009

福井大学教育地域科学部附属小学校『研究紀要第35集 つながり合って育つ』2009

福井大学教育地域科学部附属中学校『研究紀要第37号 学びを拓く<<探究するコミュニティ>>』2009

松川禮子、大下邦幸『小学校英語と中学校英語を結ぶ』2007、高陵社書店